九

南門を出てからそろそろ二刻を過ぎようとしていた。陽は中天を過ぎ、春とはいえ汗ばむほどの陽気だった。嬢さんの傷に障らなければいいが。李逵の心配はそのことにあった。早く九天玄女のところに行って、あの男の手当てを受けさせたかった。三・四度しか会ってはいないが、腕は確かだと李逵は思っている。九天玄女の話では、太医局※を出た正式な医師ではないが、金瘡科、産科、折傷科に堪能で、若い頃に太医丞※の銭乙に師事したこともあり、小方脈科※にまで詳しいということだった。李逵もその男が九天玄女の手の者を手当てするのを見て、並々ならぬ腕であることを認めていた。その男と親しく話したことはあまりなかったが、李逵はなぜか信頼感をいだいていた。九天玄女とは古くからの知り合いで、銭乙※に師事出来たのも九天玄女のおかげだと言っていたが、本当のところは分からなかった。九天玄女その人が、そもそもこの世の人とは思えない。そして、その男がただの医師ではないことに、李逵も薄々気づいていた。相当の武の達者。自分と同じくらい。いや、自分を超える武の達者だと感じていた。その男の名は知らない。ただ、九天玄女はその男を入雲竜と呼んでいた。

※太医局　官立の医科大学。ここを出た者が正式な医師とされた

※金瘡科　外傷の治療を行う　※折傷科　骨折などの治療をおこなう

※太医丞　宮廷医の高官　※小方脈科　小児科　※銭乙　鄆州出身。小児科を確立した

「曹瑛、嬢さんの容態は」

曹瑛は石勇に代わって残月の左につけていた。右は黄玉が固めている。

「まだ意識は戻ってないわ。こんなに動かせているから傷が心配。早く医師の手当てを受けさせないと」

「医師の心当たりはある。だが、それも亀伏山に入ってからだ」

「少し停まっていてください。傷を洗って新しい布に換えますから。

黄玉がいるからすぐに終わります」
李逵は頷くと、最後尾で敵の警戒をしている陳統と晁蓋に合図を送った。
曹瑛と黄玉が雪華の布換えをしている間、李逵はこれからのことを考えていた。とにかく亀伏山に入る。それは絶対だった。大きくはないが深い森もあり、地形も複雑だ。それに、蘇源が時をかけて、山のあちこちに罠を仕掛けているはずだ。銅堤山でも、蘇源は数え切れないほどの罠を仕掛けていた。陳逵はそういうことには無頓着だったが、蘇源はかなり緻密な性格だった。
問題はその後だ。いかに罠があるといっても、大規模な山狩りをされたら、早晩捕らえられるのは目に見えている。それに蘇源の砦では雪華の手当てに向かない。やはり九天玄女のところか。そして、雪華の手当てを入雲竜という男に委ねるのだ。それが最良の道だと李逵は思った。
雪華の布換えが終わっていた。
「さあ皆、出発だ。後三・四刻で山だぞ」
李逵の言葉に、蘇源の部下達が喚声で応えた。
その時、陳統が大声を上げた。
「小父さん、来た。禁軍だ」
「来たか。やはり、あまくないな」
陳統、晁蓋、男達が一斉に馬首を返した。
「黄玉、曹瑛。残月を守って山に向かえ。石勇は、儂とともに残るのだ」
「李逵様、わたしも残ります」
黄玉が、蒼月の馬首を返して言った。
「おまえは最後の盾だ。儂が倒れたら、おまえが指揮を執って嬢さんを守るのだ。いいか、これは命令だ。おまえなら、それが分かるだろう」
黄玉は、それ以上言いつのることが出来なかった。
騎馬隊の姿がみるみる大きくなってきた。その後ろには、雲のよう

に土埃が舞い上がっている。この辺りになるともう人家も畑もなく、ただ乾燥した黄土が続いているだけだった。

「陳統、十人を率いて左に。晁蓋、十人を率いて右に。残りは儂とともに中央だ。最初はぶつかるな。馬の間をすり抜けて勢いを殺ぐのだ。やり過ごしたら、反転して最後尾を叩け」

二人は左右に分かれて馬を走らせた。

「石勇、足が折れる覚悟で駆け抜けろ。歩兵が生き残るには、まず何と言っても駆け続けることだ。馬と同じだけ速くは走れん。だがな、馬は全速力で駆けておると意外なほど疲れが早いものなのだ。それに、馬は人ほど急に進路を変えられん。そこが狙い目だ。出来る限り動き回るのだ」

石勇は頷き、もうすっかり手に馴染んだ鉄棒を握り締めた。怖さは感じなかった。李逵が騎馬と戦うのを見て、馬の下にもぐり込むまでが勝負なのだと分かっていた。斧と違って馬の脚を斬ることは出来ないが、折ることなら簡単そうだ。馬が可哀そうな気もするが、これは戦だ。そんな感傷は死を齎すだけだと思った。

陳統が敵の背後に回っていた。晁蓋はまだ騎馬隊の中にいる。ぶつかってはいないが、出られないでいる。馬の差か。李逵はそう思った。晁蓋の馬の扱いは、陳統にそれほど劣らない。だが、弦月の能力は際立っている。黄玉を出せばよかったか。李逵は一瞬、後悔に駆られた。

晁蓋が騎馬隊に囲まれだした。男達の二・三人が馬から落ちる。晁蓋は奮戦して敵を斬り落としているが、多勢に無勢だった。

「石勇、晁蓋を助けよ」

李逵はそう叫んで石勇を向かわせた。男達も石勇の後を追って飛び出した。

李逵はたった一人で騎馬隊の真ん中に突っ込んだ。騎馬隊が慌てて馬を止める。李逵は素早く左右に動いて馬の下にもぐった。双斧が回りだすと、次々と騎兵が馬から振り落とされた。落ちた兵には構わず、李逵は馬を潰すことに専念した。たちまち騎兵隊の間に混乱が広がった。晁蓋達を攻めていた騎兵隊が、何事が起きたのかと振り向きだし

た。そこに石勇が鉄棒を回してぶつかって来た。数人の騎兵が馬から転がり落ちる。晁蓋達は態勢を立て直すと、騎馬隊からの離脱を図った。

後方からは陳統達が必死の攻撃を繰り返していた。だが、ともに攻めるべき晁蓋達がいないため、敵に押されぎみになっている。李逵は騎馬隊を撹乱しながら、冷静に状況を判断していた。無理押しすれば全滅する。だが、退いてもかなりの犠牲が出る。やはり、晁蓋の馬では禁軍騎馬隊には敵わない。晁蓋は石勇の助けを借りてさえ、いまだに離脱出来ないでいる。陳統達は騎馬隊の外側だ。少なくとも、陳統一人なら楽に逃げおおせるだろう。晁蓋と石勇を見殺しにするか。李逵の脳裏に一瞬その考えが浮かんだ。

「おおー」

李逵が雄叫(おたけ)びを上げた。そのまま双斧を回して晁蓋の方に突き進んだ。晁蓋達を取り囲んでいた騎兵は李逵に槍を向けた。

李逵は大きく跳躍し、ちょうど馬の背の高さで斧を横に薙いだ。李逵が着地するのと同時に、馬の背から首のない騎兵の身体がずり落ちてきた。他の騎兵達が一馬身退いた。

「晁蓋、石勇、今のうちに離脱しろ。陳統とともに黄玉の後ろにつけ」

「それじゃあ、あんたは……」

李逵が晁蓋に怒鳴った。

「何を言っておる。犠牲を出さずに逃れられると思っておるのか。儂の命令だ。おまえ達よりも儂の方が長く持ちこたえられる」

「そりゃあそうだが」

「いいからさっさと行け。石勇もだ」

石勇は晁蓋に軽く目配せすると、騎馬隊の途切れたところを選んで離脱を図った。晁蓋も渋々石勇の後を追う。

「さあて、ここからだ。黒旋風李逵、禁軍相手の百人斬りを見せてやろうか」

李逵は騎馬隊の横腹に飛び込んだ。双斧を回すと、左右の騎兵の片

足ずつが地に落ちた。絶叫を上げて、騎兵が馬から転がり落ちる。
「弓だ、弓を使え。もう同士討ちのおそれはないぞ」
騎兵が声を上げていた。
李逵は空馬に跨り、騎馬隊の真ん中に向かった。これで弓は使えまい。李逵はそのまま指揮官を捜した。逆転するには、指揮官を叩く以外に術がない。
旗が見えた。蒙と縫い取られている。あれが指揮官だろうと李逵は思った。馬はなかなかよく走る。勝ち目は薄いが辿り着けるかもしれない。李逵はもう命を捨てていた。嬢さんがそれで生き延びるなら。
李逵は思わず笑みを漏らした。
騎馬隊の後方から、地響きをたてて何かがやって来た。騎馬隊も李逵も、馬を止めて後方に目を遣った。
馬だった。三百頭はいそうだ。先頭には、一際大きな馬が先駆けを務めている。
「聞起」
李逵は思わず大声を上げていた。
大波のような衝撃が騎馬隊を襲った。馬群は騎馬隊をものともせずぶつかって来た。騎馬隊の馬が次々と膝を折る。駆けて来る馬群の勢いに、到底抗しきれるものではなかった。
聞起が蒙の旗に向かってまっしぐらに突っ込んだ。蒙の旗が大きく後ろに退がり、一騎が指揮官を守るように聞起の行く手を遮った。聞起が肩から紐状の武器を下ろす。騎兵は長槍を繰り出した。
「危ない」
李逵は思わず叫び声を上げた。それほど敵の槍捌きは鋭かった。
聞起の身体が朧月の背から消えた。やられたか。李逵は、胃の腑が絞り上げられるような痛みを感じた。ここからでは、状況がはっきりしない。まさかあの聞起に限って、馬から落ちるなどとは考えられない。馬に関しては天才的な乗り手なのだ。
朧月の首裏から、音をたてて何かが飛び出した。目にも留まらぬ速さだった。それは紐を伸ばしながら、正確に敵の顔を捉える。

「都虞侯がやられた」
兵達のざわめきが聞こえて来た。
消えたと思われた聞起は、手綱を支えに朧月の横腹に身を隠していたのだった。
「聞起、こっちだ」
李逵の呼びかけに、聞起が反応した。
「一旦離脱する。一緒に来るんだ」
聞起が朧月を駆る。全速で駆ける朧月を、遮る馬は一頭もいなかった。中には、怖れるように道を開ける馬さえいた。
「無用の小父さん、姉ちゃんは」
聞起の呼吸に乱れはない。
「命は大丈夫だ」
「命はって……それ以外は何かあったってことかい」
「会えば分かる。とにかく、この騎馬隊から離れることだ」
そう言って、李逵は聞起を促した。聞起は、騎馬隊を大混乱に陥れ、今は騎馬隊の手前で脚を休めている馬達に大きく手を振った。
「おまえ達、ありがとうな。もう牧(まき)に戻っていいからな」
「聞起、おまえが連れて来たのだな」
「俺というより、朧月がだよ。六十里先の牧から連れて来たんだ。何かの役に立つだろうと思ってさ」
「相変わらず賢い奴だ」
「けれど、それで少し遅れたよ。そうでなけりゃ、黄玉に負けることはないからね」
「黄玉は嬢さんについておる。大した活躍だったぞ」
「仕方ないか。あいつは本当に強いからな」
「聞起、おまえもなかなかのものだ。どこでそんな武器を憶えたのだ」
「ああ、この流星錘(りゅうせいすい)かい。阿骨打(あくだ)将軍に教えてもらったのさ。あんまり力がいらないんだ。大勢の敵にも結構使えるしね」
そういえば、阿骨打がそんなことを言っていたなと李逵は思い出した。

黄玉達に合流すると、曹瑛が晁蓋の左手に布を巻いていた。
「晁蓋、傷はどうだ」
「恥ずかしいぜ。これしきの怪我、まだ俺は戦える」
「そのようだな。おまえはよく頑張った。馬がよければ騎馬隊を断ち割っていただろう」
晁蓋は少し照れたような表情を見せた。
「李逵様、このまま逃げ切れるでしょうか」
黄玉の顔は真剣だ。
「どうかな。いずれにせよ、すぐに攻撃がはじまるだろう」
聞起がじっと李逵を見つめている。
「どうした、聞起。儂の本当の姿はこの通り、黒旋風だ。それを知って、儂を嫌いになったか」
「李逵……の小父さん。阿骨打将軍に聞いてたよ。俺は嬉しいんだ。尊敬する無用の小父さんが黒旋風だったなんて」
聞起の顔には、偽りのない尊敬の念が浮かんでいる。

「これで全員揃った。何が起きてもやり抜くことが出来るぞ」
李逵の声が皆の胸に響いた。
曹瑛が李逵のもとにやって来た。
「今、水を飲ませ終わったのですが、姉さんの唇が荒れてきているの。身体の中の水が足りないのだと思います。早く建物の影で休ませないと」
「傷の方は」
「膿(う)んではいないけれど、傷からかなり水が失われているわ」
「分かった。だが、こうして少しずつ進むしかない。急げば、奴らも全力で追って来る」
奇妙な均衡状態が続いていた。李逵達は、かなりゆっくりと亀伏山に向かっていた。禁軍もそれに合わせ、急がず李逵達の後を追っている。それは追うと言うより、ついて来ると言った方がよかった。へた

に急襲すれば、どんな反撃が返ってくるかと用心している。そんなふうにも見えた。きっと、すぐに捕らえられるとたかをくくっていたのだろう。それが思わぬ反撃に遭い、指揮官も戸惑っているらしい。聞起が都虞侯の一人を倒したのが効いた。あれで、騎馬隊は進撃の手を緩めた。こちらの犠牲が少なくて済んだ。痛手はむしろ、禁軍の方が大きいだろう。李逵はそう思った。

「小父さん、山が見えてきた。あいつら、このまま見逃してなんかくれないよね」

陳統が心配そうに言う。

「そうだろうな。儂らが山に逃げ込もうとしておることなど、とうに分かっておるだろう」

「何か策は」

晁蓋の声にも緊張が滲んでいた。

「策か……聞起」

李逵に呼ばれて、最後尾につけていた聞起が振り向いた。

「阿骨打の方はまだか」

「もう来る頃だと思う。さっきから待ってるんだ」

「そうか、もうすぐか」

「俺は近くの牧から馬を集めたから遅くなったけど、将軍の駐屯地は朔州よりずっと近かったから、もう着いてもいい頃だと思う」

李逵は、先行する石勇に向かって叫んだ。

「石勇、いつでも駆けられる用意をしておけ。次が、おそらく最後だ」

石勇が無言で頷いた。

審允(しんいん)が伝令に呼ばれて前衛から戻って来た。もう一人の都虞侯が、突然現れた若者に倒されたので、騎馬隊の指揮は残った審允一人に託すしかなかった。それにしても、と蒙重は思った。まさか都虞侯が倒されるとは。たかが田舎の侠の一味。そうとしか思っていなかった。それがいいように騎馬隊を振り回し、あまつさえ、少なからぬ痛手まで与える始末だった。今や蒙重も、逃げているのがただの罪人とは思

っていない。兵の幾人かは、黒い大男を黒旋風だと言っている。もしも本当にあの黒旋風だとしたら、これはもう、禁軍総力で当たらなければならない事態だった。死んだとも噂されていたが、まさかこんな時、こんなところでその名を聞くとは思わなかった。百人斬り。蒙重もその噂は聞いていた。廂軍相手だから出来たことだと笑い飛ばしていたが、さきほどの凄まじい姿を見た後では、千人斬りをしてもおかしくはないと思えた。自分が鍛えた騎馬隊が、近寄ることさえ出来なかった。人とはとても思えない。荒ぶる鬼神。蒙重にはそうとしか思えなかった。

「審允、奴らの狙いは山の中に逃げ込むことだ。山に入られたら厄介だ。その前に捕らえねばならん。次の攻撃でけりをつけるのだ。犠牲は厭わん。とにかく全員捕縛するのだ。どのような手を使っても構わぬ」

「承知しました。ですが、少人数といえども敵は手強いようです。捕縛することは難しいかと」

審允の目には、明らかに屈辱の色が浮かんでいる。屈辱を晴らすには敵を皆殺しにするしかない。審允の目はそう訴えている。

「捕縛が難しいようなら、構わん。生死は問わぬ」

蒙重の言葉に、審允は口の端を吊り上げた。それを見て蒙重は不快を感じた。三年部下として使ってきて、審允の都虞侯としての有能さは認めている。だが、敵に対する苛烈なまでの酷薄さには、蒙重は今になっても馴染めない。

最後尾についていた斥候が、息せき切って蒙重の中軍に駆け込んで来た。

「将軍、西の方から騎馬の一群がやって来ます。何やら遼軍のいでたちのように見えますが」

蒙重はまさかと思った。いくら遼から遠くないといっても、ここは国境ではない。ここ暫く、太原府が遼から攻撃を受けたことはない。いや、太原府だけではない。遼が侵入するのは、国境近辺にほぼ限られている。まして、太原府のような大きな城郭(まち)を襲うなどということ

は、蒙重にとっては考えの外だった。

「よく見てみろ。さきほどのように空馬かもしれんし、遼兵に偽装しておるのかもしれん。本物の遼兵が来るはずがなかろう」

「はい、それはそうであります。引き続き監視を続けます」

斥候はそう言って、持ち場に戻って行った。

蒙重は審允に独り言のように言った。

「どうなっておるのだ一体。次から次へとおかしなことが起きる。どうも、いつもの調子が出んわい」

「都監様のおっしゃる通りです。どうも向こうに乗せられている。そう思えます。ここは腰を落ち着けて、一気に叩かなければなりません」

「奴らはどうしている」

「黒旋風と思われる者を真ん中に、左右に二人ずつ。その後ろに十数騎の者達が」

「たかがそれだけの数に、あれだけの失態を演じたというのか」

蒙重は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「申しわけありません。今度こそ、奴らを皆殺しにします」

審允は、はじめから捕らえるつもりがないようだ。

「その言葉を忘れるなよ」

蒙重の皮肉交じりの言葉に、審允は短くはいと答えて持ち場に戻った。

後軍の方から異様なざわめきが伝わって来た。斥候が戻った時点で、百騎が偵察と制止のために向かったはずだ。日ごろからその訓練はしている。訓練通りに兵は動いたはずだ。

「どうした、何かあったのか」

蒙重は、怒りというより半ば呆れたように後ろを振り返った。

「何だ……どうしたというのだ」

蒙重は己の目が信じられなかった。

百騎ほどの騎馬が、中軍の半里ほど後ろにつけていた。しかも、す

べて遼兵のいでたちだ。
「馬鹿な、どうして遼兵が……」
言い終わらぬうちに、敵兵から矢が射込まれて来た。鋭く重い矢。間違いなく騎馬民族の矢だ。
激烈な衝撃が襲って来た。ひとたまりもない。禁軍騎馬隊は木の葉のように散らばった。

蒙重は大声で集合を命じたが、その声は、虚しく戦場の喧騒に飲み込まれるだけだった。
「何だ、これは……」
蒙重は呆然と駆け抜ける遼兵を見送った。
遼の騎馬兵は後軍と中軍を断ち割ると、その勢いのまま前衛の騎馬隊に襲いかかった。
蒙重の中軍から、騎馬隊前衛が砕け散るのが見えた。審允が懸命に兵をまとめているが、遼兵の攻撃があまりに鋭いので、逃げるのが精一杯のようだ。
たまらず、審允が百騎ほどを率いて逃げ戻って来た。三分の一も兵を失っている。
「都監様、遼軍です。百騎ほどですが、恐ろしく強い。まるで獣です」
「見れば分かる。だが、まだ三倍以上の兵力差がある。さきほどは不意を衝かれただけだ。態勢を整えれば勝てる」
蒙重は怯むわけにはいかなかった。馮湧が死に、自分まで任務を失敗したとなれば、開封府からどんな叱責を喰らうかわからない。たとえそれが、どんなにいかがわしい任務であってもだ。何よりも、これからの自分の出世にとって、これは大きな失点になりそうだった。
「審允、兵をまとめて二百で壁を作れ。その後詰を儂と残りの兵が務める。壁は二段にするのだ。一段目は敵とぶつからず、散開して背後に回り、二段目が敵を止めるのだ。そこを儂が衝く」
「分かりました。私は一段目にいて、散開のときを計ります」

こういうところが審允のよさだった。多くを語らずとも、伝えたいことをすぐに理解する。
「よし、馮湧の二の舞は絶対に避けねばならん。任せたぞ」
審允は直ちに兵を集め、前衛に二段の壁を作った。
遼軍は禁軍騎馬隊を蹴散らした後、なぜかそのまま前方に突き進み、罪人たちの方に駆けて行った。だが、必ずまた来る。蒙重は今度こそと心に誓った。

李逵の馬前に呉乞買がいた。汗血馬に劣らぬ見事な馬に乗っている。
「黒旋風、宋雪華は」
呉乞買の声は、先日とは別人のように厳しいものだった。顔にも怒りの色が浮かんでいる。
「命は、心配いらん」
「命は、とはどういうことだ」
「言葉の通りだ」
李逵は苦しそうに答えた。
呉乞買が、単騎で黄玉達の方に駆けて行った。
「これは……」
呉乞買が声を詰まらせた。
「何があった」
呉乞買が厳しい声で問い質した。
曹瑛が答えようとしたが、呉乞買が何者か分からず、助けを求めるように李逵の方を見た。
「心配ない。味方だ」
李逵の言葉に、曹瑛はようやくこれまでのことを呉乞買に語った。
「何ということを……」
呉乞買の表情には、苦渋と後悔の色が表れている。
「よく生きていてくれた」
「わたし達も必死に手を尽くしたのですが」
曹瑛の真摯な言葉に、呉乞買も怒りを和らげたようだ。

「わたし達も怒りに身を焦がしている。この仇、いずれ必ず取らせてもらう」
黄玉が静かに言った。
「おまえが鉄面女か」
「鉄面女……」
「聞起がそう言っていた。戦乙女ともな」
「ふん、くだらん。聞起の言いそうなことだ」
「こうして見ると、鉄面女と言うより氷姫（ひょうき）といったところか。そう呼んでいいか」
「好きにしろ。わたしはそのようなことに興味はない」
呉乞買は李逵を見た。
「黒旋風、おまえがついていながら何ということだ。兄者も俺も、おまえがついているからと安心していたのに」
「弁解はせん。儂がいなかった時のこととはいえ、失態であることには変わりはない」
「いつまでも無用などと気取っていたからこうなったのだ。もっと早く黒旋風に戻っていれば、奴らだって手出しをためらったろうに」
「そうかもしれん。後の祭りだがな」
「我々が村を訪れたのも引き金になったようだ。責任は、兄者と私にもある。このうえは、宋雪華を逃し十分な手当てを尽くすことだ」
「奴らを止められるか」
「百人しかいないと思っているのか。この謀克（ぼうこく）は硬軍（こうぐん）だ。宋兵ごとき、千人いても粉砕出来る」
「硬軍というと、黄頭女真のか」
「そうだ、我ら女真部隊の主力だ。遼にも、硬軍に立ち向かえる軍はない。奴らは硬軍のことを人ではなく獣の軍と言っているが、黄頭女真は家族の情に篤く信義を重んじる、信頼に足る部族だ。遼人や宋人のように、欲のために人を陥れるようなことはしない」
「言葉を知らぬと聞いたが」
「でたらめだ。家族や信義のために、命すら顧みない勇敢さに怖れを

なした者達が、勝手に言いふらしているだけだ」
「そうか、済まぬことを言った」
「そのうち兄者達も来る。おまえ達は宋雪華を守って早く逃げるのだ。落ち延びるあてはあるのだな」
「とりあえずの場所はな」
「なら、行くがいい。禁軍は我々に任せておけ」
「その言葉にあまえよう。嬢さんの手当てをするのが肝腎だ」
呉乞買は大きく頷き、一里先に待機している硬軍の先頭に戻った。
李逵は双斧を両肩にかけると、ほっとしたように黄玉に話かけた。
「これで退路は確保された。嬢さんの傷に障らない程度に急ぐぞ」
「分かりました」
「ようやくだな。長かったが、何とか嬢さんを救い出せた。無傷ではなかったがな」
李逵の顔に、はじめて安堵の表情が浮かんだ。

心の中で一匹の獣が咆哮していた。それは身悶えし、やり場のない怒りに苛まされ、獲物を求めて牙を剥き出していた。
自分は宋雪華を好きになったのだ。痛切にそう思った。その娘が、何の咎もないのに酷い仕打ちを受けた。その理不尽さへの怒りが、呉乞買の心に一匹の獣を産み落とした。はじめて宋家村で出会った時から、心惹かれるものがあった。会ったのはその一度きりだが、想いは日毎に募っていった。もう一度会いたい。幕舎の中で、何度その想いに駆られたことか。だがその願いは、こんな残酷な形で現実のものとなってしまった。若い娘にとってこの仕打ちは、時には死以上につらく思えることだろう。美しく輝いていた宋雪華を思い出すたびに、呉乞買の心の中の獣が、狂おしい雄叫びを上げるのだった。
「硬軍よ、おまえ達の誇りをかけて戦うのだ。一兵たりとも生かしてはならん。あの者達は、我々の家族を不当に傷つけた。その報いを受けねばならん。千尋の谷よりも深いその罪を償わせるには、死をもってするより方法はない。いいか、情けは無用だ。奴らを殲滅せよ」

呉乞買の言葉を聞いた兵達は、これが今までの指揮官かと一瞬顔を見合わせた。

兵達にとって呉乞買は、人並みはずれた弓引きだが、どこかあまさの残る指揮官と言えた。硬軍はまさしく女真軍の主力と言える。どうしても阿骨打のもとで動くことが多い。阿骨打の用兵は果敢だ。ここぞという時には、兵の消耗を無視してまで攻め込むことがある。そんな時先陣を務めるのが硬軍だった。

人ではない。そう言われているのは知っている。言葉すら解さない。そうも言われている。だが、そんな揶揄(やゆ)には耳を貸さなかった。家族のため、そして黄頭女真としての誇りのために戦うのだと思い定めていた。阿骨打は黄頭女真のために尽くしてくれた。その恩義に報いるために、硬軍は命をかけて戦うのだ。それが、同じ女真族からも蔑視されていた自分達の生き方だと、硬軍の兵士一人一人が知っていた。そのおかげで、今や黄頭女真といえば、女真族の間でも尊敬をもって語られるようになっている。

そうした硬軍にとって、呉乞買は阿骨打の信頼する弟という認識しかなかった。個人の武だけを見れば、呉乞買の方が上だとは思っている。そしてそれは、草原の民にとっては重要なことでもある。強者しか草原の民を率いることは出来ない。それが、騎馬の民の不文律だった。阿骨打も強者だ。それに、何よりも人間としての魅力がある。呉乞買にはそこのところが感じられなかった。どこか物足りなかったのだ。

今の呉乞買は違う。秘めていた激しさが、厚い心の壁を破って、今まさに迸(ほとばし)っていた。

「呉乞買将軍、あの者達は将軍の家族と同じですな。将軍の家族ということは、我々の家族でもあるということです。家族のために戦うことは我々の誇り。案じなさるな」

吩喇途(はらと)が言った。黄頭女真の若き長(おさ)だった。武勇に優れているだけではなく、知略そして人望まで備えている。

「吩喇途、済まぬな。この度だけは抑えがきかん。宋兵を残らず殺し

たい」
「将軍のそうした姿をはじめて拝見しました。これでようやく、阿骨打将軍とともに呉乞買将軍をも、我々の指導者として迎えることが出来ます」
「今までの私では駄目だったようだな」
「優しさは、時として身を滅ぼしますゆえ」
「そうだな。これまでの私は、本当の怒り、心の底からの苦しみを知らなかったのかもしれん。あまかったのだ」
「それがお分かりになったのであれば、もう私ごときが言うことはありません」
「よし。兄者の来る前に、宋軍を殲滅する。全員錐になって敵を断ち割るのだ」
雄叫びが上がると、呉乞買を先頭とする硬軍が、怒涛の勢いで禁軍騎馬隊に襲いかかった。禁軍はそれを受けるように、数段に組んだ陣を崩さない。呉乞買が矢を放った。禁軍騎兵が馬から吹き飛んだ。呉乞買の弓勢は信じられないほど強い。狙われた者は、例外なく吹き飛ばされるように馬から落ちた。
禁軍の指揮官が騎兵を左右に分けた。宋軍としては素早い動きだったが、呉乞買ら草原で暮らす者達にとっては、まるで牛の歩みのようなものだった。
呉乞買が矢を引き絞った。狙うのは、前列で騎兵を二つに分けた指揮官。
ぶるん、という地を揺るがすような音が戦場に響いた。指揮官が馬上から消えていた。馬はそのまま立ち止まり、指揮官は二十歩ほど後ろに倒れていた。矢は、分厚い鎧を突き抜けて左の胸を貫いている。呉乞買の矢は草原一、その矢は鎧兜も貫く。そう称えられていた。これが私の力だ。この力をもって、宋雪華のような悲劇をなくすために戦うのだ。そのためにも、弱い心は捨てなければ。呉乞買はそう心に誓った。
呉乞買の後ろから吩喇途を中心とした硬軍が、奇声を上げながら宋

軍に突入して行った。すぐに片づくな。呉乞買はそう呟いた。

前衛が壊滅した。中軍を何とか支えながら、蒙重は有り得ないものを見たように呆然と佇(たたず)んでいた。遼軍は強い。それは重々承知していた。しかし、二倍の兵力差を、これほどあっけなくひっくり返すようなものではない。蒙重とて、これまで何度か遼軍との戦を経験していた。だが、これほど圧倒的な強さを持つ敵ははじめてだった。

「これが遼軍か……」

思わず漏れた言葉に、力は全く感じられなかった。

「信じられん」

女真族の部隊に、硬軍という恐るべき部隊があると聞いていた。それでは、あれが。そう考えを巡らせたが、そんな部隊がなぜここにいるのか、その答えは皆目見当がつかなかった。

審允が矢で吹き飛ばされるのが見えた。射られたと言うより、まさに吹き飛ばされたのだった。騎馬民族は騎射に長けているが、それにしても凄まじい弓勢だ。あんな、人とは思えない者達に敵うわけがない。蒙重の胸に、急速に恐怖が広がりだした。

「全員、撤退」

蒙重が大声を出したが、それは怒号と馬蹄(ばてい)の音にかき消され、近くの騎兵にしか届かなかった。敵が一騎、蒙重を追うように接近して来る。蒙重の護衛兵が、それに気づいて前を固めた。敵はそれをものともせずに突っ込んで来る。風圧のようなものを顔に感じ、蒙重は思わず目を閉じた。頭に凄まじい衝撃を感じた。そして、馬から吹き飛ばされる自分を感じた。

禁軍は全滅したようだった。逃れた兵を除いて、動いている兵はいなかった。あの短い間に逃れた兵は、ごく僅(わず)かしかいない。

「こちらの犠牲は」

呉乞買が訊いた。

「一人も。負傷した者が五名。いずれも、命に関るようなものではあ

りません」
吩喇途の声は淡々としていた。
「宋軍は弱い。本当にな」
呉乞買の言葉には、どこか失望が滲んでいる。
「宋軍にもう少し歯ごたえがあれば、遼にしても、国境警備にもっと兵を回さざるを得ないのに。そうすれば、我らの戦いも楽になるのだが」
それは、呉乞買のそして阿骨打の本音だった。女真族が独立を果たすには、どうしても遼との戦は避けられない。宋軍が屈強であれば、遼はそちらにも兵を割かざるを得ない。そうなれば、女真族単独で遼軍に当たるよりも遥かに分がよくなる。衰えているとはいえ、遼はまだまだ大国だった。兵力差は十倍以上ある。
「やはり、宋軍はあてに出来ぬか」

呉乞買は、そこここに倒れている宋兵に目を遣った。半数以上が背に矢を受けていた。戦いを避け、逃げたところに矢を受けたのだ。呉乞買自身、まともに刃を交わしたのは数えるほどだった。宋兵の多くは、呉乞買の姿を見ただけで馬首を返していた。こんなものが軍と言えるのか。呉乞買の胸に苦いものが広がった。
「将軍、宋軍のすべてがこのようなものだとは思われないでください。ごく一部ですが、精強な軍もあります」
吩喇途が馬を並べて言った。
「呼延灼の軍か」
「他にも。特に、民兵の中に手強い将が」
「そうか。吩喇途の言うことだから間違いないのだろう」
「将軍、そのように簡単に人を信じてはなりません」
「おまえ達だからだ。私はおまえ達を疑うことなど出来ぬ。もしそんなことがあるとしたら、それは女真族が滅びる時だ」
吩喇途は少しの間呉乞買の目を見て、ただ微笑みだけを返した。
戦場の土煙もようやく薄れつつあった。やがて阿骨打の軍もやって

来る。呉乞買は、阿骨打の軍と合流して太原府の宮城を襲うつもりだった。この怒りは、宋軍を壊滅させた程度では収まりそうにない。首謀者の魯櫂は、すでに報いを受けている。残るは知府の黄文炳だった。こいつだけは殺す。曹瑛という娘から話を聞いて以来、呉乞買はそう思い続けてきた。

遠くに李逵達の姿が見える。宋雪華を庇うように、ゆっくりとした足運びだった。

「安心しろ。おまえの道を遮る者には、この呉乞買が相手になってやる」

呉乞買のその言葉は、喉元にまでせり上がって来たが、ついに口を突いて出ることはなかった。

「雪華、私はおまえを……」

呉乞買は、遠ざかる一行が芥子粒(けしつぶ)のようになるまで見続けていた。

第一部　蠢動

第一章　政和三年春　一～九

二〇〇六　十一　二十九　起稿

―つづく―